
普通な僕の異常と過負荷

SSD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通な僕の異常と過負荷

【Nコード】

N7520S

【作者名】

SSD

【あらすじ】

異常なほど過負荷過だった男の子、男鹿巧が高校に入学し、異常者の中で普通であるうとするただそれだけの物語。

ブローグ

俺、男鹿巧^{おがたくみ}は今日中学を卒業した。

「はあ。今日でこの学校も卒業かあ。」

「そうですね。兄さん。」

こいつは男鹿霞^{おが かすみ}だ。

俺と霞は双子の兄妹だ。

「これからどうするか考えましたか？」

「いやまだ。全然だ。」

何をしたいってこともないんだよな！。

「はやく決めないとダメですよ。あつ、そうだ！箱庭学園にいきませんか？」

先月に特待生として迎えてくれるって言ってましたし。」

そう。俺と霞は箱庭学園の理事長に誘われていた。

そうしよっかな。学費も払わずに済むし。

実は俺たちの親は事故で帰らぬ人になってしまった。

財産や保険金があったしバイトをしているため生活には

困ることはなかったが学費を払う余裕はない。

「今回に限ってはあれに感謝だな。」

「そうですね。では入学すると連絡をいれておきますね。」

霞は携帯で電話をし始めた。

俺たちは昔、病院で検査を受けたことがある。

その検査の結果はあの頃は意味が分からなかったが今なら分かる。

診断の結果は……異常。
アブノーマル

俺たちは異常だということだ。現に特待生は全員、異常らしい。

「兄さん。許可を取りました。今から書類を取りに来て欲しいそうです。」

まー。普通と一緒だと目立ってたけど異常と一緒にいれば目立つ事もないだろう。

「そうだな。行くか。」

「はい。逝きましょう。」

なんか文字が違ってたけど気にしないでいこー！！

俺たちは箱庭学園目指して歩き出した。

これが俺たちの物語の始まりだった

ブローグ（後書き）

感想お待ちします。

第一話　生徒会長挨拶

今俺は生徒会長挨拶の最中である。

えっ？いきなり話しがとんだって？細かいことは気にするな！気にしたら負けだぞ！！

注：【】マイクです。

【世界は平凡か？】

平凡だったらどれだけいいか……

【未来は退屈か？】

いろいろ忙しいんだよ……

【現実 is 適当か？】

適当じゃねー！バイトで忙しいんだ！！まっ、今は理事長のおかげで楽になったがな。

【安心しろ。それでも生きるとは劇的だ！】

劇的かー。だといいたがな……

あんたは恵まれてるからそんなことが言えるんだろ？生徒会長……

黒神めだか。

こんなこと思っても八つ当たりにはかななんないよな。

「そんなわけで本日より、この私が貴様達の生徒会長だ。

学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで悩み事があれば
迷わず目安箱に投書するがよい！

24時間365日。私は誰からの相談でも受けつける！！」

24時間って…寝ろよ。

この生徒会長様は1年で98%の支持率をえて生徒会長になった
正真正銘の化け物だ。

教室に戻り俺は霞にあることを聞いた。

「私たち十三組には登校義務がないんですよ？」

マジか！！じゃー俺らってかなり暇じゃん。

「暇だし俺は学園のなか見学してくる。」

「あつ。兄さん、私も行きます。」

俺らは学園の中をふらついていると、一番会いたくない奴に出会ってしまった。

「むっ？貴様たちは巧同級生と霞同級生ではないか。」

さすが生徒会長といったところかおそらく学園の生徒全員の名前を覚えているのだろう。

「こんにちは。黒神さん。」

「うむ。二人は真面目に登校しておるのだな。」

「いや、俺は登校義務がないことを知らなくて来てしまったただだ。」

明日からは休むことにしよう。と思ったが……

「まーでも家いてもすることないし来るかもしれない。」

「そうか。それはいいことだ。明日もしっかり登校するのだぞ。」

そういうことで俺たちは無事に黒神との遭遇を終えた。

俺らは黒神と別れたあと1組の教室の前に来た。

どうやら授業が終わったようだ。生徒が廊下に出てきた。

「よし、霞！入ってみるぞ。」

「いいんでしょうか？」

教室の中にはいると特に注目されることもなかったので安心した。

俺は二人の男女の生徒が話しているのに目がいった。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒の前でよくそんな啖呵切れるもんだよ。人の前に立つのに慣れてる　　っつーかさー」

いや違うだろ。あれは……

「カツ！ありやあ、人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのに慣れてんだよ、不知火。」

「そりやそうだよな。じゃなきゃ1年で生徒会長になんかなれっこないかー」さすが幼馴染！わかってるじゃん。人吉ー」

暇つぶしに話しかけてみるかっ！

「ふーん。お前って黒神と幼馴染なんだな。」

「ん？まー、そうだがあんたら……誰だ？」

「俺は男鹿巧。でっ、こっちが双子の妹の霞だ。よろしくな。」

「よろしくお願いします。」

「俺は人吉善吉。でっこっちが不知火半袖だ。よろしくな。」

「よろしくねー」

「ところでさ、幼馴染が生徒会に入っただんだし人吉も入るのか？」

「カツ！これ以上あいつに振りまわされてたまるか。」

椅子に座っていた人吉は立ち上がり指を指しながら勢いよく言い放った。

「俺は絶対！生徒会には入らない！！」

それは普通なら多少はかつこいく見えるはずだが、後ろで同じポーズをとっているめだかがいるため

俺は人吉を可哀相な目で見ることしかできなかった

め「まあ、そうつれないことを言うな善吉よ。」

人「ぎゃああああ！」

人吉はめだかに連れて行かれてしまった。

こうなったら人吉も生徒会に入るしかないな。

俺らは十三組アブノーマルに戻っていった。

第一話　生徒会長挨拶（後書き）

ご感想お待ちしております。

第二話　知られざる英雄と出会った

今、俺は一人屋上で寝ている。

「はあ。のど渴いたしなんか買ってくるか。」

俺は屋上をあとにした。

俺は適当に飲み物を買って屋上に戻ろうといていた。

しかし、そんな考えは目の前の現状を見て失った。

「ぐあああ!!」

一人の男が大男にやられていた。

あいつかなりでかいな。何メートルあんだ？

「くっ、今回は俺の負けだが次は絶対この恨みをはらしてやる。日ひ
之影のかげ空洞くうどう。」

「逆恨みだな……俺はただ力ツアゲしていたお前を止めようとした
だけなんだがな。それに……」

あの大男、なんか変だな。なんてゆうか影が薄いつてゆうより影
がないって感じた。

「……無理だよ。どうせお前もすぐ俺の事を忘れるぞ。」

日之影が最後の一撃をいれようとした。

……が当たらなかった。

「カツアゲを止めたのはいいことだが……すこしやりすぎだ。」

俺が止めに入ったからだ。

日之影は何かを思い出したような顔をする。

「……ああ、そうだな。お前の言うとおりだよ。忘れるところだった……黒神との約束を。」

黒神って知り合い多いな。

「ほら、そのAさん。早く行ったほうがいいぞ。」

俺はAさんじゃねー！とか聞こえたが無視することにした。
そこにいたAは逃げて行った。

「ところで黒神との約束って？もしよければ教えてくれない？」

「別に大した話じゃないがそれでもいいなら教えてやるよ。」

日之影は懐かしいといった感じの顔をしながら語りはじめた。

俺は去年、生徒会長だった。

その頃は学園の平和を守るため学園を荒らすものと戦っていた。

もちろん、そんなことを他人に任せられるはずもなく今年も俺がやるつもりだった。

「……ケツ！わかったよ。今回はテメーの勝ちだ！さっさとどめを刺しやがれ！！」

みことな悪役っぷりだった。

「だが、俺は必ずテメーに復讐してやる！」

また俺は同じことを言わなきゃなんないのか……

「……無理だよ。どうせお前もすぐに俺のことなんか忘れちまう。」

俺はいつものようにとどめを刺しにいった。

しかし、今回はいつものようにいかず、なにかに遮られた。

「やめる。それ以上の暴力は私が許さん。」

そんな四月だった。

俺と黒神がであったのは……

俺は初めて出会ったその日から三日三晩戦い続けた。

それだけでは俺たちの戦いは終わらなかった。

俺たちは顔をあわせるたびに殴りあった。

もちろん俺から絡んだことはない。

いつも学園の敵にとどめを刺そうとすると決まって黒神が邪魔をする。

「なんでお前はあいつらを守ろうとするんだ？お前はあいつらと違うだろう。」

「悪い奴を差別する人間は、次に弱い奴を差別する……」

何をいつてるんだ？こいつは…

「続いて、愚かな奴を差別して、更に強い奴を差別する。」

真っ直ぐ俺の目を見て、こう言い切った。

「そして最後に自分自身を特別な存在だと差別する。善意の中にある悪意。」

そいつのが嫌いなんだよ。私は。」

「わかんねえよ。例えばお前があの日助けたあの男。」

「あの男がどうしたのだ？」

「あの男は周りに迷惑を掛けるために生まれたような男だ。そんな奴を救う必要があるのか？」

「例えば、あの男には妹がいて、彼女のために強くならなければと思っている。」

そんな話は聞いたことがなかった。

「そんな話は初めて聞くが……本当か？」

「いや、知らん。そうかもしれないと言っただけだ。」

俺は今までの怒りが今になって湧き上がってきた。

「ふざけんな！なんだそりゃ！？さてはお前俺に逆らいたいだけじゃねーのか！？」

久々に俺は本気でキレた。

「俺が被害者の味方をするから、自分は加害者の味方をするっつーのかよ！！」

「まあ、すこし違うがある意味そうだな。」

「あ！？」

「だって貴様が被害者を守り私が加害者を守れば、我々は全てを守れるのだから。」

……そこまで無防備に、真っ直ぐに人を信頼した言葉を生まれて初めて俺は聞いた。

俺は黒神を今まで人とは思わずに殴っていたのに、黒神は俺を人
と思いながら殴っていたのだ。

俺の異常性、ミスターアンソウン『知られざる英雄』である俺を黒神が見つけられた
理由……

それを理解した瞬間、俺は引退を決意した。

「黒神。お前、生徒会長にならないか？お前になら俺の役目を任せ
られそうだ。」

「では、約束してください。我々で全てのものを守ると。」

「ああ！共に守っていこう。俺たちで……全てを！！」

日之影は語り終えると目を瞑った。

「そんな事があったのか……」

それで黒神は生徒会長になったんだな。

「ところで『知られざる英雄』ってなんなんだ？」

「俺を認識はもちろん、ほとんどの人間は記憶していることもでき
ない。そういう異常だ。」

「それはすごい異常だな。っと、俺はもうそろそろ行くは。」

「そうか。ありがとな、大切なことを思い出させてくれて。」

「俺はなにもしないよ。」

と、いいながら俺は屋上へ向かった。

その途中剣道場の前を通りかかった。

俺はこっそり除いてみると……

そこには血だらけの人たちが倒れていた。

「な、なんだこれ……」

と、言っていると後ろから……

「巧？なんでお前がここにいるんだよ。」

頭に包帯をした人吉がいた。

その包帯は血が滲んでいた。

「そんなことより！どうしたんだよ、その怪我は！」

「実は……」

説明によると……

一組の日向という奴が剣道をしたいけど剣道場が不良の溜まり場

になっていたから

目安箱に「彼らを追い出してください」とかいたが追い出さずに改心させようとし

たから自分の手でやることにしたらしい。

ちなみに俺が殴られたのは邪魔されないようにだ。

「で？どうすんの？やっぱり助けるか？」

「まー、あいつらが諦めなかったらな。」

すると、剣道場から声が響いた。

「勝手なこと吠えてんじゃねえ！ たった今思い出した。俺は昔剣道少年だったんだ。」

「門司さん……」

あの人は門司というらしい。

「ああ。俺もだ。」

「俺もだ。」

「俺なんか日本一の剣士目指してたんだ。」

「しょうがねえな。」

俺もついて行くことにした。

中には明らかに敵と思わしき奴がいた。

あいつはたしか…一組の日向ひゅうがだっけか？

「なあ、剣道3倍段って知ってるか？僕はあんたらの3倍強いってことだよ！！」

剣道部員たちに日向が向かっていくが人吉が日向の木刀を素手でとめる。

「へっ、お前も邪魔するんだな…って、なんで十三組アブノーマルの奴がここに
いるんだよ！！」

「お前！十三組だったのか！？」

「ああ。ちなみに霞もな。」

日向は焦りを抑えていた。

「どいつもこいつも面倒くせえー！お前！！剣道3倍段って知って
……！！！！」

日向は俺に襲いかかりながら喋っていた。

が、その日向は呆けていた。

日向だけではない。人吉たちも含め全員が呆けていた。

それは俺が手刀で木刀を切ったからだ。

折ったのではなく切ったことにみんな驚いていた。

「こんなのめだかちゃん並の出鱈目さじゃねえか……」

日向は叫びながら逃げていった。

これで一件落着だな。

俺は皆が呆けている間に抜け出して帰っていった。

翌日、俺はめだかに剣道場のことで感謝された。

「昨日は助かった。礼をいう。」

「別に気にしないでくれ。俺が勝手にやったことだから。」

「えっ？兄さん、昨日なにかしたんですか？」

「まー、色々とおったんだよ。」

俺は今日も屋上に眠りに向かった。

結局日向もめだかに更正させられたらしい

第二話 知られざる英雄と出会った（後書き）

ご感想お待ちしております。

第三話　脅迫状は絶対ダメ！

俺は13組の教室で霞と駄弁っていた。

「兄さんは部活に入ったりしないんですか？」

「部活かぁ。体験入部で一通りやってみたけどやりたい部がなかったんだよな。」

「陸上部はどうですか？兄さん足速いですし。」

「陸上とかだと本気で走るとかなり目立ちそうだからパスだ。」

俺は100mを8秒台で走ることができるんだが…
そのせいで中学の頃かなり注目された。目立つのはあまり好きではない。

「そついうお前はどんなんだ？何かに入ったりしないのか？」

「私は運動オンチですから。」

同じく8秒台で走るお前が運動オンチならほとんどの人間が運動オンチになるぞ？

「そうか。」

しかし俺はそのツッコミをしなかった

理由なんてない。ただ面倒くさかったただけだ。

「それなら生徒会に入らぬか？」

俺の隣に黒神がいた。

「ほんと黒神は神出鬼没だな。」

「めだかちゃんと呼ぶがいい!!」

「さすがに、ちゃんは勘弁してくれ。」

「めだかさん、こんにちわ。」

「うむ。でどうだ？生徒会に入らぬか？」

メンバーそんな適当に決めていいのかよ。

「俺はパス。面倒なのはごめんだ。」

「私には荷が重すぎます。」

「荷が重い…ということは入りたいとは思っておるのだな。」

「やってみたいとは思ってはいるんですけど……」

霞は生徒会に入りたかったのか。初めて知った。

「やってみたらいいと思うぞ。この会長を基準に考えず自分にできる範囲でやればいいんだ。」

霞はいつもやりたいことがあっても責任を感じて遠慮する。

だからこそ今回は応援してやりたい。

「その通りだ。頑張ることに意味がある。やろつともせずには諦めるのは一番悪い事だ。」

「わかりました……どこまでやれるか分かりませんが私に生徒会役員をやらせて下さい!!」

こうして霞は生徒会役員になった。

えっ？役職は何かって？副会長だそうだよ。

霞が生徒会に入ってから2日がたった。

今日は目安箱に入っていた悩みを解決するために集まるらしい。

「まっ、俺には関係のないことだ。」

俺は屋上で眠りについた。

目が覚めたとき、既に放課後になっていた。

俺は寝ぼけながらも屋上から下を見渡した。

「めだかはまた何をやってるんだよ？」

めだかが女子を追いかけていた。

とうとう変態にでもなったのか？……いや、もともと変態か。

後ろのほうには人吉と霞がいた。

巧「よし。あいつらに聞いてみるか。」

俺は屋上から飛び降り二人の前に着地した。

着地点には小規模のクレーターができた。

やばっ！ まっ、目安箱にいれてクレーター直してもらっよう頼むか。

「えっ！ た、巧！？ どっから現れたんだよ！！」

「兄さん！ また、屋上から飛び降りたんですか！？ 怪我したらどうするんですか！！」

そっか、そういえば中学の頃霞に学校から飛び降りて怒られたんだった。

「ところで今めだかは何をしてるんだ？」

「実はな、陸上部の有明先輩ありあけに『リクジょう部やめ口』っていう脅迫状が届いて

スパイクがハサミで切られたんだ。

理由はおそらく二年生で短距離の代表に選ばれたからというただの逆恨みだろう。」

逆恨み、かそ…の…有明先輩も気の毒に。

「ところで……人吉。お前なんで制服の下にジャージ着てんの？正直それはどうかと……」

「今聞くことかよ！！そんなことより早くめだかちゃんを追っぞ。」

俺たちは走ってめだかを追った。

本気で走ってしまったため人吉を置いて来てしまった。

「まっ、いいか。」

俺と霞はようやっとめだかたちに追いついた。

「諫早^{いははや}三年生！貴様が犯人か？」

追われてた先輩は諫早先輩というのか。

「わ、私じゃない！『リクジょう部やめ口』なんて手紙も出してない……！？」

墓穴を掘ったな、あの人。

「そつか……知らないと言つか……」

諫早さんがすごい怯えている。

「知らないのならば、それでよいのだ。練習の邪魔をしてすまなかつたな。」

と去っていった。それと同時に諫早先輩はうるたえていた。

「な、なんなのあの子。わけわかんない。人を疑うってことを知らないの?」

「諫早先輩。めだかさんは人を疑うことを知らないんじゃないんですよ。」

霞がそつと近づいてそう言う。

「そつ、めだかちゃん人は人を信じることを知ってるんだ。」

人吉が今追いついたみたいだ。格好つけてるが息切れをしている。

「中学までならあいつの見逃したやつをぶっ飛ばすのが俺の仕事だったが」

今は目安箱管理が俺の仕事なんでね。

今回だけは会長の流儀にしたがつてあんたを信じます。」

……翌日

「で最終的に有明先輩のロッカーに新品のスパイクが入ってたんだつて。」

「んで、一件落着つと。」

ガラガラ！と十三組の扉が開いた。

「いた。霞ちゃん。」

「有明先輩。どうしたんですか？」

「実は生徒会の人達にお礼をして回っているんです。霞ちゃん、本当にありがとうございます。」

本当、いい先輩だな。

「それから、巧くんもありがとね。」

「えっ？俺？」

「人吉くんに聞いたの。巧くんも手伝ってくれたこと。」

俺ってなんかしたか？

「ここは素直に感謝されるべきですよ。」

そう言われたので俺は笑顔で返した。

「俺は可愛い子の味方ですから。気にしないでください。」

ポツと有明先輩は顔を赤くして走り去っていった。何でだろう？

「兄さん、それ狙ってやったんですか！」

と言っていたが何の事だかさっぱりだ。

とりあえず……………今日も平和でありますように。

第三話、脅迫状は絶対ダメ！〜（後書き）

感想お待ちします。

第四話　夢の中の変な人

有明先輩にお礼を言われたあと霞と校庭をふらついていた。

「さっきの有明先輩はなんだったんだろうな？……ん？」

足元に何かが擦り寄ってきた。

「これは犬ですよ。ボルゾイです。初めて見ました。」

「あの別名、ロシアンウルフハウンドってやつか？」

「そうなんですか？詳しいんですね？」

「それほどでもないけど結構動物好きだしな。」

すこしの間撫でてやってから俺らは教室に戻った。

教室に戻ってすぐにめだかがやって来た。

「霞副会長、今から生徒会なので来てくれ。」

「わかりました。それでは兄さん行ってきます。」

「ん、了解。行ってこい。」

霞たちが教室から出て行った。

「暇になってしまった。どうしよう……ま、寝るか。」

そして俺はゆっくりと眠りについた。

ここは教室だな。でもさっきまでいた十三組の教室じゃないな。

俺はなにやってたんだっけ？……あ、そうだ。俺寝たんだ。

「ってことはここは夢か。妙にリアルな夢だな。」

「その通り、ここは夢だよ？」

誰だこいつ？

「ん？……あんしんいん？」

「なんで分かったんだい？」

「いや、靴に書いてあるから。」

「ああ、そうか。でもね、これはあじむって読むんだよ。僕の名前は安心院^{あしむ}なじみ。

親しみをこめて安心院さんと呼びなさい。」

「まあ、だれでもいいや。で？俺に何の用？」

「いや、ただ君がどういう人間か興味があったただけだよ。」

なんだそれ……

「ってことでもう目覚ましてもいいよ。」

どうやってさませばいいんだか。まったく分からん。

「ああ。どうすればいいのか？って顔だね？そのドアを通れば目を覚ますよ。」

「そりゃごく親切にどうも。」

嫌味っぽくいったが気にされていないみたいだ。

「また会うことになるからそれまでさようなら。」

「できれば会いたくないな。」

そうして俺は教室をでて目を覚ました。

「なんだっ たんだ？あいつは？」

その質問に答えるものなど当然居るはずもなく自問に終わった。

「外にでも行くか。」

気晴らしくらいにはなるだろ。

外へでると校庭で生徒会メンバー＋不知火がいた。

「なんだあの格好は？」

めだかは犬の衣装を着ていた。

「あ、巧じゃん、こんなとこで何してんの？」

「お前たちこそなにしてたんだよ？そしてめだかはなんであんな格好なんだ？」

「迷子の犬を探して欲しいって投書があったんだよ。だからめだかちゃんはその格好なんだ。」

つまりめだかは一周回って基本バカなんだな。

「それでは行くぞ。」

めだかは犬に近づいていく。

「しかし、以外だよ。あのお嬢様が動物が苦手だったなんて。」

「そうですよね。動物が苦手だったなんて。」

めだかつて動物が苦手なのか。ってきり逆だと思ってたんだが。

「二人とも何か勘違いしてないか？めだかちゃんは動物のことは大好きだぞ？」

「「え？」」

霞と不知火が声をそろえてそう言う。

「めだかちゃんが苦手なんじゃなくて動物がめだかちゃんのことを苦手なんだよ。」

ドドドドツ！と勢いよく犬が俺の後ろに隠れた。

俺は犬を撫でながら会話に参加した。

「動物に人の人格は通用しないからな。ただ強いものにはひれ伏すだけ。」

あいつのあの異常すぎるパラメーターが原因だ。」

「じゃあ、なぜ兄さんに対しては動物が懐くんですか？」

「そういう体質かなんかじゃないか？」

「本当なんですか？」

「いや、分からん……ってゆうか、霞。お前からみたら俺はめだか並みの異常なのか？」

「「今更ですか？（じゃん。）（かよ。）」「」

三人が当たり前のようにそう返してくる。

このあと俺は1日ほど引き籠もりになった。

次の日、巧を霞が1日中励ましてようやくと立ち直ったらしい。

第四話　夢の中の変な人々（後書き）

感想お待ちしております。

第五話　守れる奴になりたい

「俺は今、人吉と一緒に部活荒らしをしている最中である。」

「巧、お前誰に話してんだ？」

「あれ？俺は誰に話してんだ？」

「ということで俺らは今、ボクシング部に来ている。」

「おい、お前らグローブをつける。グローブを。ケガすんぞ！」

部員の人に俺らは注意された。

「あ、すいません。」

「はい。」

すこし離れたところで。

「あいつら仮入部じゃなくてボクシング部に決めてくれりゃあいいのにな。」

「ダメですよ。片方は生徒会役員ですし。銀髪のほうは分かりませんが。」

「あいつらが入ればかなりいいとこいけんのにな。」

「なんにしたって、俺から見りゃ残念な人材ですよ。」

あのバケモノ女と一緒にいなきゃ、十分天下を狙える奴らなのに。

」

俺たちは食堂にいた。

「えっと、格闘技系はこれでコンプリートか。次は格闘球技行ってみるかな。」

「よし。俺もいくぜ。」

「二人とも頑張ってくださいね。」

「お前らどうしてそんなあちこちで暴れてんだ？」

「俺の中のルールで一日五リットルの汗をかくって決めてんだ。」

「なんでお前、当たり前のように一緒に飯食ってんだ？敵だろ。」

当たり前のように日向と一緒にいた。

俺の疑問は華麗にみんながスルーしやがった。

「ぶっはああ。わかるわかる。あたしも一日五リットルのラーメン飲むって決めてるし。」

ラーメンの器に顔を突っ込んでいた不知火も会話に参加してきた。

「不知火、ラーメンは飲み物じゃないぞ。」

「そんならいやないとあのバケモンには付いていけないもんな。でもやめたほうがいいぞ。おまえら『部活荒らし』って噂になってんぞ。」

「ふうん。そんなふうになってんのか。」

俺は興味がないので適当に返す。

「いいんだよ。名前売るためにやってんだし。しかし、それじゃまだ弱いな。」

「名前売りたいのか？」

後ろから変な先輩が声をかけてきた。

「鹿屋：先輩。」

「ちょっと面かしてくれよ、人吉くんに、男鹿くん。なあにお前らにとっても悪い事じゃないはずだぜ。」

「いいよ。んじゃ行きましょうか。」

と俺らはその先輩のあとについて行った。

「あれ？人吉さんのこのメモ、格闘技系はコンプリートしたって言うてましたけど……」

柔道部がまだみたいなんですけど……どういうことでしょうか？

その疑問を聞くことなく俺たちは屋上へ向かった。

「黒神めだか襲撃計画？」

この先輩ってバカだろ。

「ひどい冗談ですね。俺、生徒会庶務なんですけど。」

「いや、間違っちゃいねーよ。お前らだって黒神にうんざりしてるんだろ？」

『部活荒らし』だってストレス発散のためだろ？」

めちゃくちゃ勘違いしてんな、こいつ。

「俺はお前らのこと結構買ってたぜ。お前みたいな頑張り屋さん埋もれていくのを
見てらんねーんだよ。お前らにだってなりたいモンくらいあんだろ？」

「なりたいもの、か…」

俺はそう呟く。

「まっ、寝返るなら放課後の作戦会議までにな。なあに、お前らが裏切ったって」

あの女はなんとも思わねーだろうよ。」

と言って去っていった。

「はあーあ。面倒くさいことになったな。」

「だな。」

人吉の言葉に同意する。

「面倒くさくなどない。実に心躍る展開だ。」

いつものことながら、めだかは人吉の後ろで行動を真似ていた。

「…いつからいたんだ？」

「最初から。」

「嫌われたもんだな。めだかちゃんも。」

「構わん。私が人を好きであれば…それでよい!!」

余計な真似をするでないぞ。善吉、巧同級生。」

「余計な真似？するわけねーだろ、そんなこと。」

「今回はお前に任せるよ。」

その頃、黒神めだか襲撃計画作戦本部。

「鹿屋さん。武器はこんくらいあればいいですよね？」

「この倍は欲しいな。」

「警戒しすぎじゃないんですか？」

「あいつはバケモンなんだ。これ位じゃせんせん……」

ガラガラッ！と教室のドアが開く。そこにいたのは。

「おお！人吉くん！待ってたぜ。」

というが人吉は鹿屋を無視して、武器の前まで行く。そして…

ドガッ！！と武器を蹴り飛ばした。

「何の真似だ！」

鹿屋が怒りの表情を浮かべている

「めだかちゃんはあるならに何されたって傷つかないでしょう。けど知ってしまったから

放っておくなんて出来ないんですよ。鹿屋先輩になりたいモノくらいあるだろっていいましたよね？

俺はね………

めだかちゃんを守る奴になりたいんですよ。」

「意味分かんねえよ。だから、これは何の真似だよ！！」

と鹿屋は人吉に武器で殴りかかろうとする。

「余計な真似だよ!!」

と鹿屋に蹴りを入れた。

「アンタたちには改心する暇も与えない。明日から頑張って噂を流してくださいね。」

生徒会長、黒神めだかの側には凶暴な番犬がいるってな!!」

人吉は溜めてからもう一言。

「それではこれより一身上の都合に基づき、生徒会を執行する。」

「というのが人吉の行動です。……以上!」

と携帯に録音した音声をめだかの居ないときに皆に聞かせた。

「なにやってんだ、巧!やめろー!!」

と照れていた。

第五話く守れる奴になりたいく（後書き）

ご感想お待ちしております。

第六話　生徒会執行部書記職

俺は暇つぶしに生徒会室を訪れることにした。

「なあ、人吉。めだかたちはもう生徒会室に居んの？」

「ああ。たぶん二人ともいると思うぜ。」

と思つて生徒会室に入ると。

「善吉。今日は柔道部に行くぞ。」

「に、兄さんも行きませんか？」

下着だけのめだかと、それを見て慌てている霞がいた。

「鍵をかける！カーテンを閉める！人目をはばかれ！何遍いったらわかるんだ！」

「さっぱりわからん。練り上げたこの肉体を衆目にさらすことに――
体何のためらう必要がある？」

「すみません。私には止められませんでした……」

「いや、霞は悪くない。あいつを止めるのは不可能だ。」

「…で、なんだって？柔道部？」

「三年生の鍋島先輩から目安箱に投書があつたんです。」

鍋島？誰それ？有名なの？

「鍋島って特待生チームトクタイのか？柔道界の反則王の？」

「まあ、何にせよ。行ってみようではないか。懐かしい顔にも会えるだろうしな。」

ん？懐かしい顔？柔道部に知り合いがいるのか？俺も行ってみるか。

「では行くぞ。三人とも。」

「…最初から人数に入ってるのかよ。」

「ってことで、今柔道場に来ています。」

「誰に言っているんですか？兄さん。」

「いや、もし小説とかだったらお約束かなって思って。」

「それは現実逃避のつもりですか？」

「まあ……半分くらい？」

「オモロイやつやなー。」

……誰???

「ようこそいらっしやいませ！ウチが差出人！柔道部部长、鍋島猫美です。どーぞよろしく！」

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをやらせてもらうぞ。」

この人が反則王の猫美先輩かぁ。つてか相変わらずめだかは先輩相手に上から目線だな。

「うんうん。頼りにしとるで！」

「で？何をすればいいんですか？鍋島先輩。」

人吉がそう聞く。

「実はな！部長の跡継ぎを決めて欲しいんや。」

「あ、そっか。三年生はもうすぐ引退ですもんね。」

霞の呟きで俺も納得した。

「そつや、黒神ちゃん。ジブンに挨拶したいゆー奴おんねん。おい^{アクネ}阿久根クン！」

と近くのドアから一人の男が出てきた。

その男は俺たちを素通りしてめだかの元へ行き、そして、

「ご無沙汰しております。めだかさん——」

と跪いた。

「堅苦しい真似はよせ、阿久根二年生。他の者が見ておるぞ。貴様ほどの男がそのように

振舞っては示しがつくまい。」

「いえ、今の俺があるのはあなたのおかげなのですから。めだかさんにはいくら感謝してもしありません——」

阿久根先輩の頭をつかみ、怒鳴った。

「私に感謝していると言うのなら頭を下げるな！胸を張れ！！」

「は、はいっ！めだかさんのっ、御心のままにっ！！」

こいつはめだかに「ご執心のようだ。どうでもいいが俺たち空気になっっていないか？

「おっと、本題に入ろう。後継者選定だったな。」

めだかが、ようやっと本題に入ってくれた。

「阿久根二年生は例外として、始めるか。我こそはと思う者から名乗り出よ。」

全員まとめて一人残らず！私が相手をしてやろうっ！！」

とやっている間も暇だった俺は外に出て眠った。

俺はまた前と同じ夢を見た。

「またこの教室かよ。安心院さんよお。」

「やあ、久しぶり。今回来てもらったのはちょっと頼みがあるからなんだ。」

頼み？こいつが？どうせろくな頼みじゃないだろうな。

「実は僕と戦って欲しいんだ。」

「お前バカ？戦うまでもなくどっちが勝つかなんて決まってるだろ。」

「勝ち負けは関係ないよ。僕も本当は戦いとかはしたくないんだけどね、このままぬるま湯に浸かっていると君自身も困ることになるよ。」

マジで戦うのかよ！なんでこんな事なくちゃなんないんだよ！

「それじゃあ、いくよー！」

巧「ちよつ、待っ……」

ふざけんなよ！こんなのに勝てるはずないだろー！

安「どうだい？思い出してきたら？アブノーマル異常なほどの完全な感覚を。」

巧「そうだな。なんか奇妙な感覚だよ。でもこの世には……完全な
んてないよ。」

安「そうかい。…今のキミはまだ完全じゃないからね。

でもここまですれば、あとは自力でどうにかできると思うよ。」

巧「まっ、感謝はしてるよ。ありがとな……」

安「また来てね？」

俺は振り向きもせず軽く手を振って目覚めた。

再び俺は柔道場に入った。

すると人吉が阿久根から柔道で一本とっていた。

「文字通りアンタの足も引っ張ってみました。ってことで、
何を認めてくれるんでしたっけ？阿久根先輩。」

「…負けを認める！一本取られたよ。」

「阿久根クンに勝つてしもた。…ってか、人吉クンの双手刈りはな
んであんな綺麗なんや？」

め「綺麗も汚いもないし、天才も凡才もない。いるのは、ただの懸
命な人間だけだ。」

私も貴様も何も変わらんよ。」

猫「なあ、黒神ちゃん。阿久根クンって柔道も綺麗やけど、字も綺麗
なんやで。」

………どういう状況??

「お前、雰囲気変わったか？」

「うん♪変わったよねー♪」

人吉の疑問に不知火も同意する。

「さあな、どうだろうな？」

「まあ、別に気にしないけどさ。」

と会話をしながら生徒会室に入ると………裸の阿久根がいた。

「なんているんだよ!!」

人吉に対して不知火は目をキラキラさせていた。

「キミを追い出すのは諦めたが、俺は別にめだかさんを諦めたわけじゃないぞ。」

これからも面倒くさくなりそうだな……人吉が。

「貴様らもういたのか。うむちょうど良いな。」

「兄さんも来ていたんですね。あれ？何かありましたか？雰囲気変わりましたよ。」

「やっぱりそうだな。霞もそう思うよな。」

霞にも言われてしまった。

たぶんだが、めだかはあまりこの雰囲気は好きではないはずだ。

めだかも同じだからな……

「うむ。たしかに変わったな。と、皆に紹介しなければな。阿久根二年生。」

「本日付で生徒会執行部書記職に任命された阿久根^{あぐね}高貴^{たかき}だ。
よろしく願います。……先輩。」

その『先輩』は人吉に向けられていた。嫌味かなにか？

……まっ、どうでもいいかぁ♪

今更だが安心院さんの言ってたこと、
いったい何が困るんだ？

第六話、生徒会執行部書記職、（後書き）

感想お待ちしています。

第七話　生徒会執行部会計職

「……………」

俺は今の現状を理解できずにいた。

まあ、寝てたからなんだけどね。

「阿久根書記。貴様には失望した。もう何もしなくてもいいぞ。」

空気重っ！！さっきまで寝ていた俺にとっては尚更だよ！

今の俺の現状は生徒会室で寝ていて起きたらこの状況だった、という感じだ。

めだかが生徒会室から出て行く。

「まっ、気にしちゃダメですよ。アンタは何も間違っちゃいな——
——「黙れ。」」

人吉の言葉を阿久根が遮った。

「俺は虫に慰められるほど落ちぶれちゃいない。
そして——一度や二度の拒絶で諦められるほどできた人間じゃない。」

そして阿久根は一枚の紙を破き、生徒会室から出て行った。

「……………どういう状況??」

「あ。起きたんですか、兄さん。」

「よく寝てられたな。今の状況はな……」

「私が説明します。実は、ラブレターの代筆の依頼がきたんです。で、阿久根さんが

担当することになって、阿久根さんが依頼どおり手紙の文面を
考えて

書いたんですけど……何がダメだったんでしょうか？」

ああ、なるほどな。めだからしいな。

「めだかちゃんは正し過ぎるからな。気づかないのも無理はねえよ……長年の付き合いの俺だって今気づいたんだし。」

「たぶんめだかは依頼人自身に書かせたかったんだろうな。

他人の書いた文面じゃ本人の思いは伝わらない。……だろ？人
吉。」

「あ、ああ。」

「なるほど。そういうことですか。よく分かりましたね、兄さん。」

「なんとなくだよ。」

よし、帰るか。

「帰るのか？」

「ああ。阿久根先輩なら別に心配はいらないだろうからな。そんな気がするんだよ。」

と俺は家へ向かった。

〽翌日〽

「ということで阿久根先輩は依頼人の八代先輩と一週間^{やつしろ}字の練習をして

手紙を書かせた結果、めだかさんは阿久根先輩を褒めていました。

〽

という話をプールでしている最中である。

「最近意味の分からない状況増えたな。俺はなんでプールにいるんだ？」

「実は投書に『あまり使用してないプールがあるから何かに使えませんか？』と、

『部費の増額して』とあったんだからこれで競いあつて

部費の増額を決めようとしてるのだ。もちろん、生徒会も参加するぞ。」

めだかが俺の疑問に答えてくれたが……

「答えになってないぞ。それじゃあ、俺のいる意味ないだろ。」

「妹の頑張っている姿を見て応援してやろうとは思わぬのか？」

霞「無理に居なくてもいいですよ。」

と申し訳なさそうに言われた。

そんな風に言われたら帰れないだろうが……

巧「わ、わかったよ！居ればいいんだろ！！居れば！」

め「うむ。ではそろってきたところで始めるとするぞ！！」

こうして俺も巻き込んだ『部活動対抗水中運動会』が始まった。

ザワザワツ——

色んな奴が居るな。剣道部の日向に陸上部の諫早先輩と有明先輩。

おっ！柔道部の猫美先輩も……あれ？引退したんじゃないかったわけ？

【さあ、貴様達。戦争の時間だ！働かざる者食うべからずと言つが、これは真理に反している。

私達はむしろこういふべきなのだ——

——働いた者は食つてよい！貴様達、欲しい部費^{モノ}は勝つて得よ！】

さすがめだかというべきか…そこまでどつどつと言える奴はそうはいないだろう。

そこで俺は話を聞くのを止めた。辛うじて聞こえたのは代表者3名での戦いということと、

ヘルパーがどうかということだけだ。

まっ、どうでもいいか。

俺はすこし眠りについた。

しかしすこし眠ったところで周りの騒がしさで目が覚めた。

その時めだかたちは……

「哀れなことだ。貴様達もかつては目先の利益に惑わされぬ純粋な水泳選手だったに

決まっている。想像を絶するほどの重度のトラウマを負い、そのような金の亡者に
なってしまったとしか考えられん。」

なんだこれ……

「黒神めだかの真骨頂その？『上から目線性善説』だよ。ってかお前、いつも肝心なときに

寝ってるよな。状況説明が大変だろうが。」

「あ、あの…私がやりますよ？」

「今回は大丈夫だ。なんとなく分かった。要するに、あの3人組が金のためなら

命でも捨てるような奴ってことだろ。それであいつはあんなにキしてるんだな。」

3人組は男2人に女1人という組み合わせだ。

実は俺も今回は事情を知って少しイラッときてる。

「めだか。頼む！あいつらに分からせてやってくれ！命がどれほど大切かを！！」

「ふっ。ああ。任せるがよい！！」

頼んだぞ。めだか……

【部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！

ルール説明は不知火さんをお願いします。】

【はいはい、ルールは簡単。ただ相手のハチマキを奪えばいいだけ！

でも、それだけじゃ下位のチームに望みがなさすぎなので

集めた数ではなく質で得点を決めようと思います。」

【つまり1位のが16ポイント、2位のが15ポイント、てな感じということですね。】

今1位がああの3人の競泳部で、生徒会は8位か、少し厳しいな。

不知火のやつ考えたな…競泳部が48ポイント33ポイントの今、競泳部が生徒会の9ポイントをとれば2位の陸上部が3位の14ポイントを

取っても追いつかれない。

つまりこれは、下位救済ルールなんかじゃなく生徒会と競泳部を戦わせるためのルールだ。

と競泳部の女が口を開いた。

「ふーん。でも生徒会と戦う意味はないから別のところでも倒そう。屋久島さん、種子島さん。」

「なんだ貴様達？そうつれなく逃げるものではないぞ。私にかかって来い。」

さすれば、私が金よりも大切なものがあることを教えてやるぞ！

！喜界島同級生！！」

いきなり喜界島の雰囲気が変わった。

「ゴメン2人ともさっきの発言は取り消します……ムカついた！だからあの女売り飛ばそう！」

「お、おう。」

屋久島先輩と種子島先輩は喜界島の覇気に気圧されている。

【それでは位置についてよい……ドンッ！】

ガッ！とめだかと喜界島が戦いだした。

「やはりすさまじいな。私はすさまじい人間は好きだ！」

「ハッ！何よ今更。人のことを亡者呼ばわりしといてさ！」

「亡者ではないか！2人3脚で泳ぐなど1歩間違えば死んでしまうぞ。」

『命より金がほしい？』わたしはその発言を許さない。貴様たちは金に溺れている。」

喜「私の父さんは金がなかったせいで蒸発した。お母さんは働きすぎて倒れた。」

どう考えたってお金のほう大事じゃん。財布を落とせば誰でも悲しむ。

でも……私達が死んでも誰も悲しまない！！」

【生徒会長、黒神めだか。ここで突き飛ばされた！これは勝負あったか——！！】

「甘えたことを抜かすな！どんな理由があろうと、そんなことが命を粗末にしている理由にはならんぞ。」

めだかが水の上に浮いていた。

それは人間技じゃないぞ。

しかしよく見てみるとヘルパーの上に立っていた。

「めだか——！！絶対に負けんじゃねーぞ——！！」

水中戦はダメでも空中戦に持ち込めばお前の十八番だ！！
おはじ

めだかは一気に跳躍し喜界島ごと空中に飛び出した。

「落とした財布は拾えばいいが落とした命は拾えんぞ。」

——貴様が死んだら私が悲しむ——！！」

とめだかは喜界島に……キスをした。

「これが黒神めだかの真骨頂その？『行き過ぎ愛情表現』なんです
ね……初めて見ました。」

霞がそうぼそつと呟いていた。

……？ってことは？があるのか、後で聞いてみよう。

周りが啞然としている中、俺はそんなことを考えていた。

この時、卑怯の名を欲しい俎にした反則王の猫美先輩が優勝して
いたことに

気付いたのはもう少しあとのことだ。

生徒会室で新たな知らせがいった。それは……

め「これから会計職を任せる喜界島同級生だ。」

……なんでもありなの？

喜「無駄遣いしたら売り飛ばします。」

め「ちなみに、レンタル料は1日320円だ。」

驚きのお値段！

これで役員全員決まったな。あれ？でも……副会長は2人じゃなかったっけか？

まっ、俺が気にする事じゃないな。

何はともあれ3人とも改心したみたいでよかった。

第七話、生徒会執行部会計職、（後書き）

感想お待ちしています。

第八話　風紀を破る風紀委員会

「ああ……暇だ。」

俺は廊下をうろついていた。

今日も生徒会室にでもいくな。

と歩いていると生徒会室の方から「ぎゃああー!!」と叫び声が聞こえ、生徒会室にかけだした。

俺が生徒会室に入ったとき、そこには

「何があつたんだ……おまえら?」

そこには、顔をボコボコに腫らせている人吉と、その人吉に金を請求している喜界島がいた。

「人吉にあたしの裸見られたの!!」

「鍵を掛けてないほうが悪いんだろ。見たくもないもの見えられたしな。」

「うわーん! お金払って! 今のひどい発言の慰謝料! …!」

と泣き目で人吉の頭をポカポカ叩き始めた。

そのとき既に俺は……屋上にいた。

なんか面倒くさくなりそうだったからだ。

基本面倒事は嫌いなタイプだからな、俺って。

翌日…

今日もいつもどおり屋上に来た。

今日はどうする？寝るor面白い事を探す？……

よし！決めた！！面白い事を探そう。

俺は屋上から下を見渡して面白い事を探した。

「……？なんだ、あれ？？」

なんか偉そうにしている奴がいる……がっ、それは置いといて霞がいた。

今日も生徒会の仕事か？よしっ！行ってみるか！！

と思った瞬間、俺は霞の後ろに立っていた。

何でだ？いつのまに俺はここまで来たんだ？屋上に居たはずなのに？

これってたしか安心院さんの……

まっ、いいか。

「おーい！霞、何やってんの？」

「えっ？兄さん、いつの間に後ろに居たんですか？」

「俺にもわかんないけど気が付いたらここにいたんだ。」

「はいはい。冗談はいいですから。」

むむ、冗談じゃないんだが……

もしかして、安心院ならなんか分かるかも。後で聞いてみよう。

巧「で？霞は何やってんの？」

霞「私は校舎が破損している所があると言われたので見に行っていました。」

巧「そりゃご苦労さんだな。」

霞「これが終わったら帰ってもいいと言われたので一緒に帰りませんか？」

ということで俺らは一緒に帰った。

翌日

いきなり俺は校門のところで数人の生徒とともにお叱りを受ける事になった。

「なんですか！その服装は！！身だしなみをしっかりしてください
！！！！！」

「……………誰????？」

「風紀委員の鬼瀬です！！鬼瀬針音おにがせはりがねです！」

「それはご親切にどうも。」

「いえ、こちらこそ。」

とお互いに頭を下げた。

「それでは、お仕事頑張ってください。それではこれで。」

「はい、ありがとうございました、って違います！！！！！」

面倒になりそうなのでここは……………逃げる！！！！！！

俺は鬼瀬を振り切り屋上で今日も眠る事にした。

ホントは生徒会室に行こうと思ったが、鬼瀬が入っていくのを見て行くのをやめた。

何度も言うが俺は面倒事は嫌いだからな。

翌朝

登校途中に人吉と会ったので霞と三人で登校した。

そして校門へ着き俺は大爆笑した。

「アハハハハハハッ！……！」

「もう兄さん。笑ったら失礼ですよ……ぷっ！」

「そ、それは無理だろ。霞だって笑ってんじゃん！人間なにすればあそこまでなるんだ？……ぷっ！」

今、校門にはあんなに服装を注意していた鬼瀬がめだかが着ているような胸元が

露出している服を着ている。胸が小さい鬼瀬にはめだかのサイズは合わず胸元がブカブカであった。

「めだかちゃんを騙して服を着せようとしたんだ。見てやるな。」

「やっぱり不愉快！黒神めだかは私が潰します……！」

今日はこれ以上ないくらい朝から爆笑できて気分がよくなった。

第八話　風紀を破る風紀委員会　（後書き）

感想おまちしています。

第九話　金属ってそんなに脆いの？

単刀直入に言おう。俺は今…

…暇である。

俺はなんでいつも屋上に來てるんだろうな。

まっ、落ち着くし、こういう場所は結構好きだから気にすることではないんだがな。

「いつそ風紀委員会にでも乗り込むか。」

いや、これするとたぶんあとで面倒になりそうだな。

「クソッ！あの風紀委員にやり返す方法は何かねえのかよ！」

ん？誰だ、あれ？

誰かが屋上に上ってきた。

俺は見つからないように隠れる。

上がってきたのはバットを持った二人組みだった。

片方は金属、もう片方は木製である。

風紀委員に逆恨みか？まっ、相手が風紀委員なら心配する必要はないか。

なにげに風紀委員強いしな。

俺は二人組みに気づかれないうちに屋上を抜け出した。

おっ！めだかと人吉とあれば……鬼瀬か？
なんで風紀委員と一緒にいるんだ、あいつら。

「ん？巧一年生ではないか？そうだ、貴様ピッキングをできるか？」
出合いがしらに名に聞いてんだ、こいつは？
そもそもなんでそんなこと聞くんた？
っていうか風紀委員の前で聞くことじゃないだろそれ。

「やったことないから分かん。というかなんでお前らはそんな状況なんだ？」

三人は今、手錠で繋がれている状態だ。

「実はな鬼瀬が――」

「そうですよ！どうせ私が悪いですよ！」

「もしかして、間違って人吉に手錠をかけた鬼瀬だったが、鍵がなくて

風紀委員会に鍵をとりに行こうとしたところでめだかと会って
ピッキングを頼んだが状況は最悪になっていつて今に至るとい
うはけか？」

「お前は探偵かよ！！」

今のは勘なんだがな。

「ともかく俺にピッキングは無理だ。他を当たってくれ。」

「そうか。それでは仕方がないな。」

と俺は三人と別れた。

とみせかけて俺は跡を追っている。

え？なんでかって？それはあれだよ。屋上にいたバットの二人組
みが

この機会を逃すはずがないからだよ。

まっ、めだかがいるいし心配はいらないだろうけどな。

跡を追っているといっても俺はめだかたちから100mは離れて
いる。

近くだとめだかに気付かれるだろうからな。

それにしてもめだかはさっきから人助けばかりしているな。

人助けはいいことだろうが、あれじゃいつになっても風紀委員会
室に着かないんじゃないか？

とまた歩き始めるがすぐに歩みを止める。

気付くとめだかたちの左右に挟みこむようにバットの二人が現れ
ていた。

ここからじゃ声は聞こえないが二人が鬼瀬を庇うように立ち塞がっている。

人善とめだかに二人が襲い掛かる。

がやっぱり助けなんて必要なかったみたいだな。

二人はバットを砕いて追い返していた。

これで安心だな。

「さて、帰るか。」

俺は帰りながら考えいた。

めだかが砕いたの、金属バットに見えたが気のせいかと。

後々考えると今回の事が原因だったのかもしれない。
後に起こる……

……風紀委員会との抗争は。

第九話　金属ってそんなに脆いの？（後書き）

感想お待ちしています。

第十話　やり過ぎなきゃ正義じゃねえ！ー

昨日の出来事のあと、

家でめだかのマネをして金属バットを砕こうとしてみたが……意外と簡単に砕けた。

霞にはありえないようなものを見る目で見られたが……なんでだ？
と思い出しながら俺は学園内をぶらぶらとしている。

音楽室前を通りかかるとき一人の子どもが音楽室に入っていた。

「あれって、もしかして……」

あいつは……間違いない。二年十三組、雲仙冥利。
飛び級で学園に去年入学した風紀委員長だ。

「雲仙ができたってことは……これはやばいんじゃないか。」

あいつはやり過ぎるところがあるからな。

「一応、監視しておくか。」

俺は扉の前に行き中を覗くことにした。

「えーっと、今日は皆さんにちょっと殺し合いをしてもらいまーす。」

という雲仙の一言で周りからぼそぼそと声が洩れてきた。

「やべーぞ、アレ、風紀委員長だ。」とか「飛び級の十三組じゅうさんぐみだろ、アイツ。」など

という声が聞こえてくる。

「あー違うな。だめだなオレは。大勢を前にすると殺し合いをさせなくなっちゃう。」

えーっと、みなさんの発する騒音ちくりが公害レベルにうっせーつう苦情があつたので

適切な処理をとらせてもらいにきました。

雲仙に部長らしき人が近付いて行く。

そして、雲仙の肩に手をおいて話しかけた。

「あのね、ここはオーケストラ部なんだよ。オーケストラというのは大音量で演奏する

ものだから多少の迷惑は仕方がないものなんだ。

これからはなるべく気を付けるから今日は勘弁してもらえないかな？

そつだ、お菓子があつたはずだから誰かそれを雲仙君に持たせー

持たせてあげて、そつ部長が言いきる前に雲仙の行動によって遮られた。

雲仙は彼の手を折っていたのだ。
部長が苦しんでいるにも関わらず気に留めずに話し出す。

「人の体気安く触ってんじゃねーよ。風紀委員に賄賂が通じるとでも思ってたのか？」

俺が出てきた時点で死刑確定なんだよテメーラは！殺戮してやるから迅速に死亡しろ！」

雲仙が手を出した瞬間、俺は雲仙が何かをすることに気づき咄嗟に扉を開けた。

「やめろ、雲仙！それ以上はやりすぎだ。」

「テメーは男鹿巧！俺はただ平和のために風紀を正しているだけだぜ？何が悪いんだよー？」

おまえさっき、殺戮とか言ってたどろ。それはもう平和じゃねーぞ。

「平和のためにするのは悪い事ではないが、おまえはやりすぎだ。」

「甘えんだよ……やりすぎなきゃ正義じゃねえだろうが、よっ！！」

よっ！！、と同時に俺に何かを飛ばしてきた。

避けようと思ったが俺は後ろに部員がいることに気づき、かわさずにつけた。

くそっ！痛つてえな、この野郎が！！

俺は少しキレかけたが何とか堪えた。

俺は感情に任せた戦い方はあまり好きではない。

「今のは見えねーまでもかわすことはできたんじゃないのか？」

「うしろに人がいるだろうが……少しは気をつけるよな……」

そういい、睨んでやると雲仙は後に飛びのいた。

とそこにめだか、不知火、鬼瀬がやって来た。

「ん？これは一体どういう状況だ？巧同級生、雲仙二年生。」

面倒くさいやつが来たな。まっ、今回はありがたいがな。

「どうもこうもねえよ。雲仙がオーケストラ部を殺戮とか言ってたから止めてるだけだ。」

「そうか。正すのはいいことだが殺戮はやりすぎだぞ、雲仙二年生。」

「ケツ！どうせテメーは平和的解決を目論んでるんだろ？」

甘えんだよ！話してわかるか！事情なんか知るか！ルールを破った奴が罰を受けるのは

当たり前だろーが！それを

なあなあにボカしちまったら事情さえあれば許してもらえつつつておんなじことを繰り返すに決まってるだろーがよ！！

……やりすぎなきや正義じゃねえ！！それがオレのポリシーだ！！」

「オレ達は正義の集団だ、武装や暴力は手段に過ぎねえ！だからテーマ率いる生徒会と

敵対するつもりも……ある！」

俺のときのようにまた何かを飛ばし、めだかに当たる。

「あの身長差で上からの攻撃……」

そう、黒神への攻撃は上から来ているのだ。

「なんでよけなかったんだよ。」

「貴様から、攻撃される理由がない。ゆえによける理由がない。」

まったく、めだからしいな。

「や、やめてください！今生徒会と敵対する理由なんてないじゃないですか！」

「正義と聖者は相容れない、だからどっちかが潰れるしかねえんだよ。」

黒神イ。テーマのスタイルって上から目線性善説とか言われてるらしいじゃねーか。

だったら、オレのスタイルは見下し性悪説だ！

お前が花を育てるなら、オレは芽を摘むほうなんだよ！」

「たしかに私と貴様では主義がちがう。だがそれは話し合いで解決できるレベルの問題だ。

だから敵対する理由などない！」

「ケケケ、とことん上から目線だな黒神。だっけど、もうそんなレベルの話じゃないとオレは思っぜえ？」

「それは一体どういうことだ。」

「なんせオレは既に……生徒会役員に四人、刺客を放っちゃったんだからな——！」

「……！！！！！！」

やばい、急いで霞のほうに行かないと大変なことになる！

「テメーらみたい奴にはこういうのが一番効くんだろ！」

第十話くやり過ぎなきゃ正義じゃねえ！ーく（後書き）

テスト期間にはいるので、というかもう入っていたので
次回の更新は来週あたりになります。

第十一話　霞の異常性（前書き）

霞の異常性の内容はですが
本人は使用しません。

第十一話　霞の異常性

「テメーらにはこういうのが一番効くんだろ？」

今の状況を簡単に説明すると……

雲仙が生徒会役員四人に刺客を放った……以上！！

まったく、雲仙の野郎は面倒なことしやがって。

「めだか、三人のこと任せていいか？」

「ああ。霞副会長のことは貴様に任せるぞ。」

もちろん、と駆け出そうとしたとき

「あ！？どこ行こうってんだよ、今から間に合うわけーだろうが！
！」

そついうと雲仙は俺たちに再び攻撃してくる。

「あり？」

直撃したかのように見えたが、めだかは忍者のように制服の上に
着ていた服だけが

残っていた。巧はというと……

「よし。これららっておくか。」

と攻撃を全てキャッチしていた。

「あいつは化け物か？」

とそこにいる全員がその疑問を抱いたのだが当の本人には伝わるはずもなかった。

今、男鹿霞は校庭にゴミが散らかっていると投書をされていたと聞き、校庭へ来ていた。

なぜか、風紀委員がやっていたので一緒にやることになった。

「でも、何で一人でやっているんですか？」

「みんなはそれぞれ仕事がありますので、そちらに……
でも、みんなそれが終わったらすぐに来てくれると言っていたので。」

「そうなんですか。それじゃあ、みなさんが来る前に終わらせられるようにがんばりましょう。」

「ええ、みんなが来る前に終わらせますよ。わたしはいつも一人でやりきっていましたしね。」

そういうと、風紀委員はどこからかバットを取り出した。しかし、

霞はそれに気づいていない。

風紀「そう、

いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも

いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも

いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも

ひとりで掃除してきました。……………こうやってねっ!!」

霞が振り向いたとき既にバットは目の前まで迫ってきていた。

霞は驚いて目を瞑りました。

当たることを覚悟していたがいつまでたっても痛みはこなかった。

霞が目を、開けてみると

「兄さん!」

「どうやら間に合ったようだな……………よかった。」

「信じられません、先輩から連絡をもらってからまだ一分もたっていないのに!」

おそらく風紀委員の子が言っているのはもつともだろう。
相手の居場所もわからないのに、この広大な箱庭学園で人探しを

一分以内にするなんて

正直言って不可能だ。誰もがそう考える、それが自然なことだ。

「さてと、俺の大事な妹に手を出そうとしたんだからな。覚悟はできてんだろうな？」

風紀委員の子がかなり怯えている。けど、そんなの知るか！助けてやっただけ感謝しろよな！

「あ、あの…兄さん。もうその辺で、怖がっていますし。」

むっ。まあ、霞がいいなら許してやるか。

「私が狙われたってことは、他の人も！！」

「ああ。でも、めだかが行ったから大丈夫だ。」

「私が無事だったこと知らせなくちゃ！ちょっと電話してきますね！」

と霞は走っていった。

「まったく、その風紀委員。ちよつとは感謝してくれよ？」

「ええ。してますよ。あそこで霞さんが止めてくれなかったら……」

「いや、そういうことじゃないんだよ。俺に感謝してほしいって行ってるんだよ。」

風紀委員の子が？？という顔をしていたので説明してやることに

した。

「もし俺がお前を止めなかったらお前は病院送りじゃすまなかったかもしれないんだぞ？」

霞は昔から身体能力を自由に換えられるんだよ。もし反射的に全力で殴り返されたら

下手したら死んでたんだぞ？」

風紀委員の子の顔が青ざめていく。

「今度からは注意しろよー。」

と俺はその場を離れみんなのもとへ戻った。

第十一話　霞の異常性（後書き）

感想があれば是非とも！！

第十二話　俺は人間が大嫌いだぜ

風紀委員の刺客を追い返したあと、俺たちは生徒会室に集まっていた。

「風紀委員長の雲仙二年生は飛び道具を武器にしていることはさきほど言っただけだが、

その実物を、巧同級生。見せてやってくれ。」

「ああ、…これだ。」

このときのために雲仙にぶつけられたときにキャッチしておいたのだ。

「なんだこのボール？」

「否、ただのボールではない。スーパーなボール……スーパーボールだ。」

「……は？」

四人が「何言ってるの？」って感じの目で見ている。

「気持ちはわからなくてもないが、これはマジな話だ。」

「しかし、たかがスーパーボールとて侮るなかれ。こいつの反射力・反発力は大したものだぞ。」

と言ってめだかはそのボールを指で弾く。すると……

ドガガガッ！！そのボールは壁という壁に跳弾する。

「…な？」

「「…な？」じゃねーよ！危うく当たるところだったんだぞ。」

パチパチパチと拍手の音がすると

「いやーお見事お見事！一年以上そのテクでやってきてるけどタネを見抜いたのは

テメーらが初めてだぜ。」

雲仙が生徒会室の中に入ってきていた。

カチャッ

「もちろんただのスーパーボールじゃさすがに話にならねーから、素材に気を使ったりなんたり

武器になるようそれなりの改良は施してあるがね。

ま、でも正体が割れたらそれで終わりな子供だましかだよ。言うなら手品みてーなもんだ。」

そういつて雲仙が玉をばら撒く。

掃除が面倒くさそうだな、コレは？

「手品の解説のためにきてくれたわけではあるまい。……なんのよ
うだ、雲仙二年生。」

「冷てーことおっしやるなよ悲しいなあ！仲良くしようぜ黒神一年生。オレ達は怪物同士で

化物同士で似た物同士なんだからよお！テメーとオレは鏡写しさながらによく似てるってなあ！」

「でも、…左右逆なんだろう？」

「おうよ。そっくりだから相容れねえ。……人間が好きなんだって？だけど黒神、テメーはよ、

人間のキレーな面しか見ちゃいねー！人間が好きとのたまう以上は嘘も裏切りも、罪も醜さも、妬みも未熟さも、憎しみも全部ひっくるめて好きじゃねーとズルイだろうが！」

「うるせーんだよ、雲仙！！ようするにお前は人間が嫌い。そういうことだろ？」

あつ！先輩つけるの忘れてた…まあ、いいか。

「ああ、そうだ。だからちゃんと嫌ってるぜ！優しさも友情も！愛も奉仕も！義理も平和も

大嫌いだ！！だが、それでこそ誰彼区別なく正義の鉄槌を下せるってもんだろ？」

なんだコイツ？いきなり乗り込んできてこんな話。これじゃまるで時間稼ぎをしているような……

「上から目線性善説とかよー、実際その聖者^{セイ}っぷりはヒデエよ。聖^テ者の理想に

従えない奴はイコール愚者^{ダメ}ってコトになっちまう。」

カチャッ

窓の鍵を閉めた？なぜそんなことする必要があるんだ？

そついえば雲仙が入ってきた時も同じ音がした……あれはドアの鍵を閉めた音だったのか？

「どうやら二つの誤解があるようだな、雲仙二年生。

第一に上から目線性善説などは善吉が勝手に言っておるだけで私は聖者などではないし第二に――」

コロコロ…雲仙が転がした玉足元に転がってくる。

ん？スーパーボールにしては転がる音が硬いような……！！

「黒神！！今こいつがばら撒いたのはスーパーボールなんかじゃない！火薬玉だ！！」

「……！！！」

全員が驚いた顔をする中、雲仙は…

「おっとバレたかい？ダメだなーオレって本当にダメだ！手品下手過ぎ！だがまあ遅い、

仕込みはギリギリ終わってる。炸裂弾『シンデレラ灰かぶり』！一個ありや老朽化した壁

くらいならヨユーでブチ抜けるシロモノだ。」

雲仙がマツチを取り出す。

「……密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃすま

ないよ。」

「そつだ！子供っぽい脅しはやめろ！悪ふざけにしては度を越している！」

「テメーらニュースとか見てねーのか？ダッセエな。最近のガキは何考えってかわかんねーんだぜ？どーするよ黒神。こっから見事改心させてみせるんだろ？それともやめてくださいつてお願いしてみるか？」

「……やめてくだ——」

「おせエよ、ボケ。」

ドーーーーンッッッ！……！！

第十二話　俺は人間が大嫌いだぜ（後書き）

感想あれば是非。

第十三話　私は貴様を許さない！

「ここは箱庭学園生徒会室。

今ここでは学園には相応しくない光景が映し出されていた。
そこには瓦礫の山ができていた。

その中から人が出てきた。

「ケツ！風紀委員会特服『スノーホワイト白虎』——ダンプにはねられてもへっち
やら

だっつー触れ込みの対圧繊維で縫製された最新科学の産物だが、
重くて動きずらいのが
難点だな。しかし、ここら一帯は消し飛ばせると思ったんだが
な……

……！！！！！！！！？」

：

雲仙が何かに気付く。

「……嘘、だろ……あれだけの量の爆弾を使っただぞ！」

雲仙が驚いたのは破損が少なかったことではない。
もちろんそれにも驚いていたが一番驚いたことは全員が無事だっ
たことである。

「黒神！テメー一体何をした！？」

「簡単なことだ。火薬玉に火がつく前に花瓶の水をかけ不発弾にし、窓ガラスを割る。」

そのときに少しだが火薬玉は外へ蹴り飛ばせる。そしてなにより、爆発で恐ろしいのは

爆熱よりも爆風だ。だから、私はこの三人をロッカーに入れ爆風を遮った。」

めだかの言っていることは口で言うのは簡単なことだが、実際やるなど不可能といってもいい。

「すまなかったな、二人とも。ロッカーには三人しか入れなかったのではな。」

「私は大丈夫です。それより兄さんが私を庇って……え？に、兄さん？」

「俺は全然余裕だ。ってか、なぜかほぼ無傷だ。」

そう、めだかや霞の服や体がボロボロになっているが俺に到っては服以外はほぼ無傷に等しい。

「さきほどは助かったぞ。二人が火薬玉を窓の外に蹴り飛ばしてくれなければ、

ここまで被害をくい止めることはできなかった。」

まあ、さすがに霞の身体能力強化の「最強」フルオーバーの状態には及ばないがすこしは力になれたかな？

「ケケケケケ！いや本当にスゲーなその聖者っぷり気持ち悪いーっ

！テメーのガンコな信念に
オレはちよっぴり感動すらしてきたぜ！」

だがめだかは何も答えない。

「ケケケ！それでアレだろ？この期に及んでもどうせテメーは争う理由なんかねーって言うんだろ？ 仲間もオレも傷つけずに済んで一件落着！めでたしめでたしハッピーエンドってことになるんだよな——」

「うるさい。」

めだかが一言喋る。しかし、その一言は俺たちさえも威圧感を感じるほどの一言だった。

「……………哀れなことだ。貴様もかつては人の善性を信仰する心優しき美少年だったに決まっている。情状酌量に値するだけのきっかけがあつてそのよくな残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考えられん。」

いつものめだかならここはいい台詞を言う場面だ。そう、いつもなら……………

「しかし！だからと言って私は貴様を許さない！！」

やべーっ！！俺に向けられた訳でもないのにめだかの殺気で冷や汗が半端ねー！

「雲仙二年生、貴様の言うとおりだ。私と貴様は似ている。私も貴

様と同じで自分を正しいと

思ったことなど一度もない。もつといい方法はなかったか、ちゃんと他人の役に立てているか、起こりうるすべての可能性を考えたか。誰かの悲しみをみおとしていないか、

気付かぬうちに易きに流れていないか、人を助けることに慣れてしまっていないか。

いつだって迷っているし、いつだって怖い。

……私は正しくなんかない、ただ正しくあろうとしているだけだ！！」

「？ わかんねーよ、何言ってるんだか。おんなじじゃねーかそんなの。」

「わからんか？ 私には貴様の言うような大層な信念などないと言っておるのだ。

少なくとも！ 友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念など私にはない！！」

気絶していた人吉たちが目を覚ます。

「私の聖者っぷりが気に入らないんだってな？ 雲仙二年生。」

めだかが早歩きで雲仙の元へ向かいながら叫ぶ。

「いいだろう。ならば、がっかりさせてやろう。私が怒りに任せて暴れてしまうような

ただのくだらない人間だということを教えてやろう！！」

「人吉くん、めだかさんがあの状態になるのはいつ以来だ？」

「……………中一の夏休み以来ですよ、だから三年振りですか。」

あの状態というのは今の状態のことか？つてかめだかのマジギレなんて初めてみた気が……

「そうかい、そうだな。俺もあの頃はめだかさんのことを血も涙もない

理想主義者だと思っていたよ。」

「……………黒神めだかの真骨頂その？、『乱神モード』。こうなった
らもう俺でも止められねーよ。

雲仙、お前おわったぜ。」

マジギレしてるめだかには悪いが、まあ、お手並み拝見だな。

「……ケケケ！人のコト勝手に終わらせてんじゃねーぞ、ボケー！乱
神だろーが魔神だろーが

火山の前じゃ消し炭だぜー！！」

雲仙がスーパーボールを手にめだかに向かって突っ込んだ。

ドンッ！！

「ガッ、ガハアッ！！」

黒神めだかの攻撃。雲仙冥利は腹に一撃をくらった、300のダメージ！！

…………ゲームみたいなこと考えちゃったよ、なんでだろう？

「ダンプに跳ねられてもへっちゃらな制服だって？それを聞いて安心した。つまり三発までなら

大丈夫ということだよな、私が本気で殴っても！！」

第十三話　私は貴様を許さない！――（後書き）

感想是非！！

かなり時間がかつてこれだけ？と思われるかもだけど
そこは暖かい目で見てくださいれば助かります……

第十四話　もう二度とお前を一人にはしないよ（前書き）

更新に時間がかかってしまいました。
どうもすみませんでした。

こんな駄文にもかかわらず見ていただいている方、本当にありがとうございます。

第十四話　もう二度とお前を一人にはしないよ

ドガッ！！

めだかに殴られた雲仙が校舎の壁に激突する。

「たいしてダメージがあるとは思えないがそのまま立ち上がれない振りをしておけ、

今ならまだ許してやれるかもしれん。」

「…ケケケ冗談、痛くも力ユクもねーっつーの！ノーダメージだよボケ！」

あいつの服ゴムでできてるんだろ？めだかはそれを何メートル飛ばしてんだよ…

「そうか、あくまでも戦争を選ぶか。ならば私の理性が少しでも残っている内に忠告しておこう。

私はあらゆる格闘技の指南を受けておるが、その技術を貴様相手に使うことはない。

その技術は人間のものだ……私は今から人間ではなく、獣のように貴様を撃つ！！」

「…ケツ、なーに言ってるやがる！返り討ちもいいとこだ。」

「そうは言っているが、もし雲仙に切り札がない場合…雲仙に勝ち目はないな。」

俺は雲仙たちには聞こえないくらいの声でそう呟く。

「どういっことですか？」

「雲仙のスーパーボールにしろ、火薬玉にしろ、あの武器は基本屋内用だろ？」

だから外ではあまり役にたたないんだよ。」

俺らが話している内に雲仙は屋内に吹き飛ばされていた。

「めっ…めだかちゃんっ。」

その声にめだかは俺らの方へ視線をおくる。
そして再び前を向くと、

「私の主義に巻き込んで悪かったな、貴様達。あとで腕章を返してくれ、

ここから私は一人でやっていくことにするよ」

「——！！」

とめだかは中に入っていく。

数分後、俺らが黙っているといきなり校舎が揺れだした。
そして始めに沈黙を破ったのは喜界島だった。

「…なにあれ？一体何が起こっているの？」

「決まってるんだろ、めだかちゃんが怒ってるんだよ。」

巧、霞、喜界島、阿久根先輩、もしも引き際があるとすればここだぜ。めだかちゃんの

側にいればこれからもずっとこんなことが続く。これ以上巻き込まれたくないなら

あいつの言う通り今が生徒会の止め時だ。」

……いつの間にか俺も生徒会の一員みたいになってないか？

「……防御は崩され、攻撃は通じず、切り札はまるで切れやしねえ。情けねえ限りだが

オレにはもう何も残っちゃいねえ。」

あきらかに敗北を認めざるを得ない状況でも雲仙は態度を変えずに言い続ける。

「しかしな黒神、それでもオレはテメーに負けっちゃねーんだ。なぜだか分かるかい？

テメーはオレを改心させることができなかった！それはテメーにとっちゃあ敗北だろ？

お前は強かったが正しかったわけでも優れていたわけでもねえ、

他のすべてを手折られようと

オレは信念を曲げやしねえ。オレは明日からも何も変わらずにこ
ういい続けるぜ、

オレは人間が大嫌いだ！！」

「そうか、私は人間が大好きだ。貴様は改心しなくていいよ、貴様
に明日は来ないからな。」

そっぴいめだかが雲仙にトドメを刺そうとした

ガシッ！

「やめろめだかちゃん、やり過ぎだ。」

四人がそれを止めにはいる。

ちなみに俺は…

「テメー、男鹿巧！人の体に気安く触れてんじゃねーぞ！」

雲仙の寝首をつかんで持ち上げていた。

「……………貴様達、離せ。巻き込まれたいのか。」

「うん、そつだよ。あたし達は黒神さんに巻き込まれたいの。」

「めだかさんに何と言われようと俺達は生徒会を辞めません。」

「私を生徒会に誘ったのは黒神さんです。だから、今さら辞めるな
んて言わせませんよ。」

「……………めだかちゃん、俺達はもう二度とお前を一人にはしないよ。」

その言葉にめだかの雰囲気がいつものものに戻っていく。

「今回はたしかにやり過ぎた、すまなかったな雲仙二年生。私が悪かったよ、貴様には己の未熟さを学ばせてもらった。これからもご指導ご鞭撻のほどをお願いするぞ！」

と言いめだかは去っていく。

「ちよっ…めだかさん、どちらへ!？」

「病院に決まっておろう。あちこち骨が折れておる、内臓もズタズタだ。」

「ええええええっ!!！」

その状態であそこまで暴れるか、普通? いや、違うな。あいつは根っからの異常、か。

でも……俺も人のこと言えないか……

「あれ? 兄さんは?」

みんなが気づいた頃、俺はすでに……

「よし、買い物して帰ろう。」

と夕食のメニューを考えながら学園の外に出ていった。

それにしても俺の異常がどういふのか……少し分かってきたかもしれない。

まあ、面倒なことは気にしないのが一番だ。

……………忘れよう。

第十五話 あなたに常識はないんですか？

めだかと雲仙の戦いの翌日、俺は用事があつてあるところへ向かつている。

と、そこでめだかと遭遇した。

「ん？巧同級生。こんなところでどうした？まさか貴様も呼ばれているのか？」

貴様もということはめだかも呼ばれているんだな……

俺らの目的の場所が一緒ということで一緒に行くことにした。

「めだか、怪我はもう大丈夫なのか？」

「ああ。私のほうはもう大丈夫だ。それより外傷はなかったが貴様も病院には行ったのだろうか？」

「まあ、霞に無理やりだけどな……」

「そうか。あまり霞副会長に迷惑をかけぬようにな。……うむ、着いたようだぞ」

話しているといつの間にか目的の場所へついたようだ。

『理事長室』そう書かれていた。

そう、俺らはこの学園の理事長、不知火袴しらぬいはかまに呼ばれているのだ。

めだかがノックをしてから部屋に入っていく。それに続いて俺も中に入る。

「まあ、どうぞお掛けください。」

遠慮なく俺もめだかも座ることにした

「雲仙くんとの小競り合いは大変でしたね、黒神さん。理事会も彼の正義手やりすぎを焼いていたものですから正直言って助かりましたよ。箱庭学園理事長として正式にお礼を言わせてください。」

「礼にはまったく及びませんよ、不知火理事長。それより私としてはお孫さんの制御をお願いしたいものですな。」

「ははは、無茶を言わないでくださいよ、黒神さん。袖ちゃんをコントロールできる人間なんて精々君の幼なじみの人吉くんくらいでしょう。」

「……………確かに。」

めだかは納得といった表情を見ると、今度は理事長が少し目を開き話し始めた。

「さて、それでは早速、本題に入りましょうか。目安箱に投書してまで君に来てもらったのはほかでもありません。巧くんには袖ちゃんに頼んだのですが、しつかり届いたようで安心しました。」

「理事長さん、話がそれてますよ?」

俺がそう言っていると笑いながら答えた。

「そうでしたね、それでは黒神めだかさん、男鹿巧さん。君たちに折り入ってお願いしたいことがあります。」

「それは怖いですね。理事長さんは不知火の祖父ですからね、どんな無理難題をふっかけられるか……」

「まあそう身構えずに、簡単なことですよ。実は雲仙くんにはあるプロジェクトに参加していたのですが今回のことで静養しなければなりません。なので、あなた方どちらかに代役を務めてもらいたいです。」

「プロジェクト……ですか？」

めだかは疑り深くそう聞く。

「私は便宜上、それを『フラスコ計画』と呼んでいます。」

そのあと理事長から一通り説明を受けた。
要約すると人為的に天才を作る計画ということらしい。

「……では黒神さん、巧くん。ここでひとつ老人の実験に付き合っていただけませんか？」

と言うと、理事長はサイコロの入ったグラスを目の前に出した。

「これを振ればいいんですか？」

理事長は「ええ……」と返してきた。

先に黒神が振ることになり、サイコロを振る。

理事長は驚愕した。

いや、俺も驚いたけど……だって、普通は八つのサイコロが全て重なるなんてありえないだろ？

そっか、俺らは普通じゃないんだな……

俺はそんなことを考えてうなだれていると、理事長が心配そうに声をかけてきた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫ですけど、少し休んでからサイコロ振っていいですか？」

「ええ、どうぞ。」

「てことでめだか先に行つててくれ。」

「ああ、わかったよ。それから不知火理事長、申し訳ありませんがここで正式にお断りさせていただきます。」

と、黒神は頭を少し下げ、理事長室を出て行った。

少し休んだところで、

「さて、理事長。サイコロを振る前にひとついいですか？」

「ええ、なんでしょう？」

「生徒の間違ひは注意するべきだと思いますよ？覗き見とか……」

「……！！！？気付かれていましたか……出てきて結構ですよ。」

すると理事長の座っているソファの後ろから男三人と女三人が出てきた。

「まっいいや。とりあえずこのサイコロを振ればいいん——」

ドガッ！

後ろにいた一人の男がいきなり俺に殴りかかる。

「いやあ、つい反射的に手をだしちまったなー」

「初対面の相手をいきなり殴るとか……あなたには常識はないんですか？にしても……いい反射神経ですね？」

「……！！一発で見抜くなんてな……ありえないほどアブノーマルだぜ、男鹿巧！！」

「いきなり殴り掛かってきたんですから自己紹介くらいしましょうよ。」

そう言つとそれぞれ自己紹介してきたので頭の中で整理することにした。

えっと……男メンバーが

刀を持った奴が宗像形。むなかたけい 験体名『ラストカーペット枯れた樹海』。

いきなり殴り掛かってきた奴が高千穂仕種。たかちほ しぐさ 験体名『ハードラッピング棘毛布』。

やけに偉そうな態度の男が都城王土。みやこのじあつと 験体名『クリエイト創帝』。

んで女メンバーが

仮面を被った小さめの女が行橋未造。ゆくはし みぞう 験体名『リビットラビリス狭き門』。

天井に足でくっついている、変な奴が古賀いたみ。こが 験体名『骨折
指切り』。ベストベイン

顔に包帯を巻いてナイフを刺している奴が名瀬天歌。なぜ 験体名『ブラックホワイ黒
い包帯』。

……脳内補完終了!!

「そろそろいいですか？」

「あつ、はい。わかりました、では……」

と俺は今度こそサイコロを手に取り軽く投げた。

テーブルの上に軽く投げたのだが……

バキッ！！！！

木製のテーブルが半分に砕け、八つのサイコロも砕けた。

みんなが啞然とする中、俺は……

「あっちゃー……このテーブルの弁償代はさっき殴られた治療費つてことで……それじゃっ！」

と俺は理事長室から駆け出した。

第十五話　あなたに常識はないんですか？（後書き）

オリジナル要素を入れたいけどできない……

第十六話 4 1 3 6 1 6 3 7 3 5 6 4 1 ? }

「~~~~~」

俺は鼻歌を歌いながらめだかを探している

探すのは面倒だけど先に行つてつて言っちゃったから探すよな、
普通は…

するとどこからかドーンッ！！とすごい音がした

「おい、聞いたか！三年の教室の前で女子生徒二人が暴れてるらしいぞ！！」

「マジか！行つてみようぜ！！」

トラブルか… ってことはめだかかな？

なら行つてみるか！！

そろそろ俺も自分の異常性を使い慣れたほうがいいころだしな

きつとプラスα計画でめだかたちが何かするだろうしな

ってことで異常性発動！！

時は遡り数分前

そこは三年十一組教室前の廊下

そこには鉄球のついた鎖を手につけている女とその鉄球をくらったであろう女がいた

くらった方の女の地面にはクレーターが出来ており、頭から血を流し倒れていた

「4136

(お前)

163735641?

(最強ってなんだと思う?)」

しかしそこにいる野次馬たちの中には彼女の言葉を…数字言語を理解できるものはいるかもしれない

それは彼女が異常だからである。異常の考えは異常にしか理解できない。しかしその理解者である異常は彼女、雲仙冥加によって地に伏せられていた

「1 2 4 1 5 3 2 5 8 6 5 8 7 1 6 0 8 5 1 2

（仮にこの世で一番強い奴がいたとして）

6 8 8 7 4 6 4 7 1 8 4 1 8 6 4 6 4 5 2 2 ?

（そいつが食中毒で死んだら料理を作ったコックが最強なのか？）

6 8 7 6 4 5 6 4 1 6 2 1 3 7 4 6 8

（核兵器を作れるような世界一の頭脳を持つ学者さんが）

3 6 4 3 5 4 3 7 8 7 6 7 8 6 7 6 1 8 7 ?

（意地悪クイズに答えられなければ出題者は宇宙一か？）

「……あの子、一体なんて言ってたんだ？」

「さあ？なんか数字を呟いてるみたいだけど……」

冥加がそちらを見ると先ほどまで呟いていた野次馬はビクッ！と
反応するが冥加……

「……………0 9 1 2（まあ）」

と興味もないようにそちらから目を逸らし再び前を向く

「3 5 4 3 6 4 6 5 4 2 1 6 8 7 6 8 2 1 4 1 4 1 2 4 5

（かように考えれば考えるほど最強の正体はわからないけれど）

3 6 4 3 5 6 4 6 8 7 3 4 3 1 3

（とにかく私が目指すのはそれだ）

2 1 4 1 2 5 4 4 6 5 7 8 7 6 5 4 6 3 2 4 『 1 3 3 2 5 1 3 』

！

（そのためにはモルモット集団『サーティン・パーティー
十三組の十三人』への加入は必須条件だ！）

4 3 5 6 7 4 8 5 7 4 3 1 2 4 3 6

（悪く思っなよ黒神めだか）

0 9 1 1 4 3 5 2 5 6

（ま、とはいえ）

5 3 2 8 8 3 2 7 5 2 3 9 9 …

（私の言葉が理解できるわけがないか…）「

彼女は振り返りながら、

「3 5 6 2 4 7 4 7 2 4 5 3 5 4 3 5 7 4 6 5 2 4 5 6 5 7 4

（こんな奴の首を手土産にしてもフラスコ計画には参加させてもらえないかもしれん）

4 9 3 6 8 7 6 1 3 5 4 2 6 5 3 2 5 4 7 6 5 5 2 6 7 3 —

（場合によっては十三組生をあと何人が潰して私の実力を示す必要があるな——）

「5 3 8

（待て）「

冥加はめだかが立ち上がったことに驚いたが、それだけではないめだかが数字言語を話したことに一番驚いていた

「8 7 9 8 6 7 5 ? 4 4 4 4 2 3 6 6 3 2 2 3 5 7 ? 5 6 3 1 2 4
2 3 5 4 3 6 3

（貴様、一体何者だ？私のクラスメートか？雲仙二年生の姉君みたいだが）

3 7 8 8 7 1 — 8 6 7 6 3 3 7 4 1 8 6 7

（単純な仇討ち——という訳でもなさそうだな）

「∴ 4 6 4 7

（∴ ほう）

3 2 5 6 7 8 7 5 4 6 5 6 4 5 5 6 4 7

（私の言葉をこれだけのやり取りで解読したのか）

3 2 5 4 5 4 6 3 6 3 6 3 6 3 7 6 3 2 4 3

（そんなことができるのは弟くらいだと思っていたがな）

3 7 8 7 6 5 3 1 2 4 2 3 4 6 6 5 7 8 6 4 8

（それにしてもよく立ち上がったものだ）

7 5 3 2 5 2 8 1 0 0 — 1 2 4 2 5 4 6 3 1 9 4 1

（重量100キロ——中身まで詰まった掛け値なしの鉄球なのだが）

9 7 8 — 6 7 5 4 3 5 2 1 1 4 5 6 8 7 4 3 2 5 4 7 5 4 ?

（いや——むしろ、お前はあえて避けなかった風にも思えたぞ？）

「6 5 7 5 4 3 4 5 2 4 2 5 4 2 3 3 5 4 5 7

（貴様から攻撃を受ける理由がない）

9 9 9

(ゆえに)

3 2 5 2 3 5 1 2 3 ∴ 1 1 4 !

(避ける理由が…ない!) 「

めだかはふらつきながらもそう答える

「…………… 8 9 4 7 5 2 0 3 9 1

(…………… そうか、ならば)

2 1 4 8 7 2 1 4 ! !

(もう一発喰らっておけ!!) 「

ゴッ!! メキ、メギ!

「ぐっ ∴ ふううつ!」

今度はわき腹に直撃した

「…………… 2 1 4 8 7 2 1 4

(…………… もう一発だ) 「

今度は上から顔面への一撃

「うわ! また避けねー! 今度は顔面に当たるぞ!!」

しかしその一撃は——当たらなかった

「アホウ。攻撃される理由がないんやったら避けんかい」

とあの人がめだかを持ち上げ飛んでくる鉄球を蹴り、軌道を変えたのだ

関西弁のあの人……それは、

「お……おお、鍋島さんだ。十一組の鍋島さんだ」

「鍋島さんだあああああつ！」

「俺達の鍋島さん！鍋島猫美が現れた！」

「反則王鍋島！今日は俺たちにどんな卑怯を見せてくれるのかなあつ！」

「クククツ 登場しただけで騒ぎすぎやっちゅーねん そんな才モロイことしたらへんで」

めだか体育座りで拗ねたように言った

「……………大した人気だな鍋島三年生」

「いやいや支持率98%の黒神ちゃんに敵わへんよ」

「8 5 6 8 5 3 4 6 5 7 4 3 5 2 5 2 5 2 3 5

（おい、邪魔をするな十一組）

5 3 6 4 5 1 3 2 4 3 2 4 2 4 2 3 4

（これは十三組の問題だ、お前には関係ない）

「ククク！何ゆーとるかさっぱりわからへんけど、言いたいことはわかるでー」

ざけんなや！ぼ大好きな友達がボコられとるのに関係ないわけあるかい！！」

「……………！！」

いきなりの鍋島先輩の豹変ぶりにめだかたちが驚いていた

「クククツ」なーんちゃって 事情は知らんけど要するに女子同士の可愛い喧嘩やろ？

やったら、ウチも混ぜたりーや」

と制服を脱ごうとした、そのとき、

「よし！異常性成功だ！………… あゝなんかマズイ状況で出てきちゃったのか？」

と暢気に現れた主人公にめだかを除く生徒たちは啞然とすることしかできなかった

第十七話　　なら俺が最強になつてやる！――

「とりあえず…はじめまして男鹿巧です。趣味は…あれ？俺趣味なものないんじゃないか？」

とりあえず自己紹介はこんな感じでいいか…それにしても趣味はあつたほうがいいかな？

「4 1 3 6 3 4 1 5 6 3 7 3

（お前も異常者だな）

8 3 6 1 9 6 7 4 2 8 4 1 3 6 3 2 5 4 7 6 5 5 2 6 …

（ちょうどいいお前を倒して私の实力を示すでしょう…）

「あの鍋島先輩、あの人なんか怖いんですけど…鉄球を武器にするとか中二なんでしょうか？」

「5 7 2 6 8 3 6 4 ! 5 7 2 6 ! !

（誰が中二だ！誰が！！）

なんだよ、普通の言葉理解できんじゃん！

「2 7 4 6 9 4 4 5 7 3 1 1 2 1 6 8 9 6 3 1 8 3 6 4

（何を言っているか分からんが「中二」だけはわかったぞ）

8 3 6 2 ! 4 1 3 6 7 4 3 2 8 3 6 2 ! !

（殺す！絶対にお前だけは殺す！！）

あとで日本語教えないとな

「黒神ちゃん、あの子何てゆーとるんや？」

「ええ、雲仙姉は——」

「殺すゝ絶対にお前だけは殺すゝって言ってますよ」

黒神が答えようとしたところに俺が口をだす

「なんや、男鹿クン。あの子の言葉分かつとるんか？」

分かるだろ、あれくらい……ってか、分からないほうがどうかと思う

「さすがは異常者やな……なら、話せるんか？」

えっと確かあの子は……雲仙冥加だっけ？

……ッ！やばい……！……あの子……

結構タイプだ

まあ、それと好きになるのは別だけだな

「5369！」

（とりあえず！）

5738！

（いくぞ！）

俺は異常性を使い、冥加の後ろへ行く

「ッ！！」

冥加は驚いた様子を見せるがすぐに俺に鉄球をぶつけてきた

「^{ミッシング}行方不明」

俺がそう呟くと鉄球が俺の上を通過していく

「5738534136978

（…それがお前の異常性か）」

「0912886374

（まあ、そんなとこだ）」

異常の一端だな…

行方不明…俺に向かってくるモノの向きを変える異常性だが……

弱点があるとすれば、その対象を俺が認識していないと使えない
ってところかな？

俺の異常性に対抗するためか、冥利は戦う方法を変えてきた

冥加は腕についた鉄球つきの腕輪を外した

「もしかして、それを外すとドラゴンボールみたいにスピードが上がるとかww」

「3245662」8399943」311226

（『ドラゴンボール』だけわかったぞ）

86536135532324354324425677563
47567867？

（大方、私が道着を脱いだ孫悟空よろしくスピードアップするとても予想したのだろう？）

244

（ふん）

68535

（正解だよ）

ドガッ！

「俺の後ろに回りこみ、俺の後頭部に一撃！！とかなると思った？
ww」

俺なんか性格変わってないか？

冥加が殴つたのは俺ではなく、俺の後ろの地面だ

「0475!

(ダメか!)

「89571207598757891035419

(あのさあ、お前可愛い女の子なんだからこんな物騒な遊びとか止めようよ
「

「7...7893!?...4//...4719!!

(か、可愛い!?...//だ、黙れ!!)

4794136573298573495290!!

(なら、お前が私に最強の正体を教えてくれよ!!)

俺は冥加に手を伸ばす

冥加は怖くなつてか、目を瞑つた、が

俺は冥加の肩を掴む

「479573282759327!!

(なら俺が最強になつてやる!!)

「...579817590

(...それは本当だな)

8794819070953...

(もしウソだったら許さないからな...)

ヤバイ！今までと違って顔赤くして涙目で上目使いつてキャラ変わりすぎだろ！！

というかなぜ顔赤いんだ？涙目と上目使いは男に対して有効とか中学の頃男子に教わったけど…

顔を赤くするのもその一種なのか？

あとで誰かに聞いてみよーっと」

「8 7 4 9 1 5 7 3 2 4 1 3 6 7 5 9 3 5 2

（約束するよ。俺はお前のために最強になる！）」

「7 ∴ 7 3 4 1 3 6 8 7 5 9 2 7 6 0 5 4 1 3 6 3 1 0 5 9 5 8 6

（な、ならお前が最強になるまでお前を見届けてやる）」

よし、約束しちまったし手始めに……

「よし黒神！行くぞ」

「ああ…だが、その前に少し寄ってもよいか？」

「？…ああ、なるほどあの人のところか？」

「ああ、だがその前に善吉を連れて行こうと思う」

善吉も道連れ決定か…

これも幼馴染の宿命だ！

「一人撃退すればそれで終わりだとも思っていたかい。とんだ勘違いだな、人間は一匹みたら三十匹はいるって言うだろ？」

変な三人組み登場つと…

「はあ、とつとと行こうぜ」

めだかが変な三人組に無視して通り過ぎようとする

フォー…ドサツ×3

えええええ！

どうしよう…最強になれるかな？

いきなり…めだかが横切っただけであの三人組みが吹き飛んで倒れたんだよ！

マジめだか化けもすぎるでしょ…

「8574136579357398…！」

（おい、お前らどこに行く！）「

「5795748179？682757289 784379…」

（どこって決まってるんだろ？フラスコ計画を潰しにだよ あ、でもその前に…）「

「ああ、

48917920478！

へんたい

（兄貴を訪ねてみようと思う！）「

それより善吉へんな奴めづかしに絡からまれてないといいいけどな…

第十八話　異常側へ来い

そんなこんなでめだかの兄に会うために今、人吉を探そうとして
いるのだが…

「で、人吉を探すっていうが心当たりはあるのか？」

「いや、しらみつぶしになるだろう」

めだかに計画性を求めた俺がバカだった

雲仙姉…つまり雲仙冥加についての後日談だが家に急いで帰って
いった

なんか日本語を一から学ぶらしいが頑張っしてほしいものだな

と、それよりも今は人吉を探さないとだな

「ならば、屋上から行こう」

「いや、ちょっと待ってくれ…」

こういつときに便利なのが異常性だな

『アンサー…トカー
答えを導き出す者』

これはその名のとおり疑問に答えてくれる異常性だ

「よし、めだか。人吉の居場所がわかったぞ。不知火も一緒にいたい

だ。早く行——」

「不知火だと！……！急ぐぞ、巧！！」

めだが、俺の襟を掴んで引っ張っていく

それにしても巧、か……いつもは男鹿同級生なのにな……

俺は雲仙先輩に教えてもらった。フラスコ計画のこと、それにめだちゃんや巧も誘われているってことだが……めだちゃんは、ま
ずないとして巧は……まあ、あいつもないな

「フラスコ計画ねえ。ロクでもねーこと企んでやがるな、あの理事長は！」

不知火、お前理事長の血縁なんだろ？なんか詳しいこと知らねーの？」

「んー？血縁っていつでも遠縁だからね、おじーちゃんがなにやってるかなんて知らないよーん

そんなことより人吉♪お嬢様たち探さなくていいの？」

「わーってるよ！だからこうやって学園中くまなく探し回ってたんだろうが！」

この学園は何なんだ？フラスコ計画は『十三組の十三人』サーティン・パーティって連中を中心にやってんだろ？まさか雲仙先輩クラスがまだ何人もいるのか？

「お前達、黒神めだかの同胞と見る」

こんなときに誰だよ。こっちはそれどころじゃ……

「偉大なる俺がお前達に質問してくれよう。謹んで答えることを許すぞ。目安箱めだかボックスとやらが何処にあるか、俺に教えてよい」

俺は一般の高校生だけど黒神めだかという化け物と十三年間！幼馴染をやってきた…だからそれなりに人間を見てきていはいるつもりだ。

だけど、だからといって…こんなこれを目の前にするのは――
――初めての経験だった

気づけば不知火がいなかった。あのお調子者が面白いセリフのひ
とつも残さずに、ただ逃げたという事実が、現状を分かりやすく示
しているようだった

「おい、お前、俺を前にいつもで立っているつもりだ？」

『跪け。』

「

ズン！

……！何だこれ！体が…跪いた状態から少しも体を動かせない！！

「無駄な革命はやめなよ、人吉くん」

木の脇から一人の少女（完全装備で男か女か分からない格好）…
行橋未造だ

「都城王土の真骨頂その？『言葉の重み』。王の言葉には誰も逆ら
うことができないんだからね！」

次から次へと…いつからこの学園は変体の巣窟になったんだ！

最初からです

「つまらない説明はもういいから…早く用件言えよ、王野郎！」

「うむ、不知火以外になら誰に懐こうと貴様の自由だが、しかしどうだ。私を差し置いて男に跪くとは、あまりにつれないのではないか？」

声で誰か分かった…ってか何気にあいつら一緒にいたんだな…

「ケツ、つれないのはどっちだな！俺が必死に探してる中、巧と一緒にいるとはな！」

「何いってんだよ。めだかとは問題児とケンカしてきただけだよ」

こいつらバカだな…

チラッと王野郎を見てみると笑っていた…

こいつもバカだな……

人吉が王野郎に跪いてる…何やってんだ、あいつは…

「…どうやら目安箱を探す暇が省けたようだな。黒神めだか、それから男鹿巧。お前らといえど俺の前にその尊大な態度はいただけん…

『平伏せ。』

「

グシャッ！

うわぁ、めだか…地面をえぐるほどの平伏し方って、どうかと思うぞ？

「た、巧！お前、なんともないのか！？」

「？…それってどういうことだ？まあいいや」

「まあよからう、どのみち今日はあいさつだけの予定だ。これを渡すだけのつもりだったのだからな」

一枚の便箋をめだかに渡した

「その中にデートの誘いが入っている、読んでおけ。そのとき改めてじっくり話し合おう」

「貴様と話し合うことなど何もない……」

「意地を張るな。雲仙冥利には感じるところがあつたはずだ。偉大なる俺はそれ以上だぞ。」

異常側へ来い、黒神めだか。くだらん連中ノーマルのために己が存在を消耗するな。お前は他人のためではなく、俺のために生まれてきたのだ」

とかなんとかいいながら去っていった
その後を行橋が着いていった

本当は一発入れときたかったけど止めておいた

理由はなんだって？そんなの決まってるだろ？

どうでもいい相手だったからだよ」

「まったく助けに来たやつがやられてたら世話ねーな」

「ああ、やはりフラスコ計画がどうあれやはりバージョンアップは必要不可欠らしい」

なんか顔がすごいにやけてやがる…

でもまあ、自分以上の存在に出会ったんだ。いくら化け物でもうれしいのかもしれない

…でもその考え方、狂戦士みたいだな

「でバージョンアップって具体的にはどうすんだ？」

「愚問だな、人吉。めだかの近くにはそれに適任の奴がいるだろ？」

「…まさか！めだかちゃんが自分からあの人に会いに行くなんて…」

「うむ、だから貴様を探しておったのだ、一緒に来てくれ」

ということで俺達はバージョン18・5になりに行くことにした

嘘です…ごめんなさい……

「やあやあよく来てくれたね、ようこそだ。一年振りだぞ愛しの妹、めだかちゃん」

そこには本をもった青年が一人。言っている内容を抜かせばまともな人間だ

「勿論、妹愛溢れる僕にはお前の用件くらいわかりきっている。すぐにお兄ちゃんが全盛期に戻してあげるから安心したまえ！」

そう、彼——黒神真黒まぐろはただの異常者だ……
アブノーマル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7520s/>

普通な僕の異常と過負荷

2011年10月8日23時56分発行